

## 題目：シモーヌ・ヴェイユの哲学

——フランス反省哲学の発展的展開としてのヴェイユ思想——

氏名：小林敬

(論文内容の要旨)

本論文は、シモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil, 1909-1949) の思想を、フランス反省哲学の思潮上に位置づけて把握しなおすことを試みるものである。

ヴェイユの晩年数年間に残された、政治や社会の具体的諸問題と不可分な仕方で開催される自己無化を基調とした宗教的言説は、しばしばキリスト教(カトリック)的神秘主義思想と評される。また、初期および中期の旺盛で活動的な労働問題への献身や社会活動・思想も知られており、サンディカリストにして闘士としてのヴェイユの姿も、よく知られるところである。こうした種々のヴェイユ像は多くの人々の関心をひきつけてきたが、彼女の思想自体がいかなる哲学的背景を有しており、いかなる必然性が彼女の思想を規定しているのかといったことは、表立って論じられることが少ないように思われる。また、晩年のヴェイユの神秘主義的と評せられるような思想は、それ以前の、一見すると主知主義的に見える彼女自身の態度といかなる関係にあるのかといった問題、換言するとヴェイユ思想の内部における初・中期と後期との思想的連続性に関する問題は、ヴェイユ研究においていまだ解決されずに残されている問題である。

本論文では、ヴェイユの哲学者としての立場を検討することによって彼女の哲学史上の位置づけを論じると同時に、ヴェイユ思想の内部に存する初期から後期にかけて思想的展開の問題にも一つの解決を与えることを目的としている。

上記のような目的のもとでヴェイユの哲学について論じるにあたって、彼女の思想形成期における師アランの影響を検討することを通して、ヴェイユ哲学をフランス反省哲学との連関のもとに位置づけて考察するというのが、本論文が行うアプローチである。メーヌ・ド・ピランに端を発するフランス反省哲学のなかの、とくにラシュリエ、ラニョー、アランからヴェイユへと至る一つの思潮に目を向け、彼らが共有している方法や問題意識を同定することによって、この埋もれた潮流の独自性とその思考の射程を示すことを試みる。同時に、ヴェイユに思想史上の位置を与えることを試みるのである。このような思潮上での位置付けの検討を通じて、ヴェイユの初期および中期思想と後期思想の連続性あるいは非連続性の問題を、フランス反省哲学がその内部に含んでいる問題系との連関で把握し、彼女の初期から後期に至る思想の展開をフランス反省哲学における反省の二義性の問題の展開として解釈する可能性を提示する。

本論文は三章からなるが、その三章にわたる考察に入る前に序論を設けて、これまでのヴェイユのテキスト受容史および現在の一次文献のテキスト状況の概略を整理して提示する。というのも、現在刊行中のガリマール版ヴェイユ全集出版以前の一次文献の出版状況は、

学術的正確さという点においては不安定な状況にあったと言わざるをえないからである。ヴェイユ没後に始まった諸々のテキストの刊行は、編者による介入の度合いがかなり大きく、それらのヴェイユのテキスト受容史がその後のヴェイユ理解に多大な影響を与えてきたと思われる。本論での作業を行うにあたっては、ガリマール版ヴェイユ全集の出版に伴い近年おおいに変化してきているヴェイユの一次文献の出版状況を踏まえたうえで、これまでのテキスト受容史およびヴェイユ思想受容史自体に一度批判的な目を向け、検討し直すことが不可欠だろうと思われるのである。

第一章ではヴェイユの初期・思想形成期の諸テキストを取り上げ検討することによって、初期に形成された彼女の哲学的立場の確認を行う。ついで第二章においてヴェイユが思想形成期に多大な影響を受けたアラン、ラニョーらの立場と彼女立場とを比較し、哲学者としてのヴェイユの自覚的な位置づけを論じる。さらに、ヴェイユの初期の哲学的立場が後年に至って変化するか否か、変化があるとすればどのような点においてであるかを論じる。第三章ではラニョー、アラン、ヴェイユと継承される思潮に固有の性格を同定するために、アランおよびラニョーの「反省的分析」を検討する。さらに、この「反省的分析」において参照軸となっているスピノザに対して、彼らが共通に有している一定の距離の取り方に着目し、ラニョー、アランからヴェイユにいたる思考の特徴を同定することを試みる。

## 第一章：初期・思想形成期のシモーヌ・ヴェイユ

まず、最初期にあたる高等師範学校準備学校時代から高等師範学校時代（1925-1931）に目をむけ、ヴェイユの思想形成期のテキストの検討を行う。彼女の「哲学」的骨子は、アランの強い影響下にあった高等師範学校準備学校時代から高等師範学校卒業までの間に作り上げられた。当時のヴェイユの諸論文から彼女の「労働」概念の形成過程を辿ると、その「労働」概念がアラン哲学を下敷きにして形成されていることがわかる。アランにおける精神と世界という二項の対立的関係を、ヴェイユは知覚論および認識論において自ら辿り直すことによって、〈精神としての自己〉と〈対象としての世界〉の両者を一挙に把握し現前させる唯一の契機としての「労働」概念を提示する。これはアランの意志および行為の哲学を下敷きにした議論であり、ヴェイユにおける「労働」概念の形成過程は、〈世界—自己〉関係を「行為」においてとらえるアラン哲学——この「行為」は抵抗としての対象を現前させる努力的行為であるがゆえに「労働」と名づけられるにふさわしい——を、忠実に受け継ぎ、自らのものとしてゆく過程であったといえる。

本論文では、中期以降のヴェイユ思想の具体的な展開を、それぞれ検討することはできなかったが、こうした「行為」（＝労働）の哲学を、ヴェイユがアランおよびラニョーにならって知覚論（認識論）と不可分に成立せしめているという事実は、中期以降のヴェイユにおける「労働」や「行為」の問題を検討する際に、見落としてはならない点となるであろう。ヴェイユがこうした〈世界—自己〉関係を、認識論的枠組みから検討してゆく際に狙いと

ているのは、単に認識の構造を明らかにすることではなく、「行為」における人間的自由をその原理から確保するためでもあった。こうした認識論と行為論の密な連携こそ、ヴェイユがアランに範をとっているところなのである。

## 第二章：ラニョー、アラン、シモーヌ・ヴェイユ

上記のようなアランの哲学自体が、アラン一人のものではなく、彼の師のラニョーから受け継がれた哲学史的背景を有したものであることを、第二章以下で論じる。すなわち、ヴェイユがアランから継承したところの認識論と密に連続した「行為の哲学」は、アラン自身は師であるラニョーから受け継いだものであり、より広範にはメヌ・ド・ビランに端を発する「フランス反省哲学」の流れに位置するものである。ヴェイユは、自身の「労働」の哲学を形成してゆくにあたって、直接にはアランに学びながらも、度々ラニョーの知覚論（認識論）を参照し、かつその背景にカントの分析論を見出しており、フランスのカント受容——それは認識論と行為論が密に連携したものであるが——という参照軸を含んだものとしての「フランス反省哲学」の流れを、自ら強く意識しつつ範にとっていたことが確認できるのである。換言すると、ヴェイユはこうした「フランス反省哲学」の流れを自覚的に引き継ぎ、自らの立場としようとしていた。ヴェイユ自身が自らの思索を上記のような思潮の末端に位置づけていると言えるのである。

こうしたヴェイユ自身の哲学史的立ち位置に関する自己理解は、初期や中期に限定されるものではなく、後期にいたっても一貫して保持されているものである。彼女の自己理解の上での初期と後期との一貫性は、従来問題となっていたヴェイユの初期と後期の連続性・非連続性の問題にもひとつの回答を与えることになるであろう。『重力と恩寵』や『神を待ちのぞむ』所収のテキスト類が書かれたマルセイユ時代を経たのちも、ヴェイユはビランに連なる「ラニョーとアランの知覚の理論」が、自分自身の表面的には「宗教的」に見える諸考察と密に連携したものであることを言明している。したがって、われわれは、後期までのヴェイユの全著作を、フランス反省哲学の一展開、ヴェイユ的展開としてうけとり、解釈してゆく必要性へと拓かれるのである。

## 第三章：「反省的分析」における二義性—ラニョー、アランからシモーヌ・ヴェイユへ—

フランス反省哲学の「ヴェイユ的展開」を特徴づけるためには、ラニョーおよびアランの方法であるところの「反省的分析」を精査することによって、ラニョー、アランからヴェイユへと至る一思潮の特徴を把握する必要がある。スピノザに倣って名付けられたという彼ら「反省的分析」を検討すると、そこには彼らに共通して、スピノザに対する一定の距離の取り方が存していることが確認できる。彼らは自らの方法論であるところの「反省的分析」において、スピノザに範を取りつつも、最終的局面でスピノザ的であるよりもむしろ「デカルト的」であることを選択するような、ある種の「反スピノザ的」な態度をとるのである。こうした態度は、「知」の最終的局面において「行為」へと必ず回帰し、精神および世界を

「行為」における両者の緊張関係においてのみ把握しようとするという、彼らの共通の態度となる。

こうした特徴は、彼らの「現実存在」の把握の仕方に如実に現れている。つまり、外的世界としての「現実存在」は、あくまで精神に対する抵抗的な質量・物質性において把握される。「現実存在」は常に〈自己—世界〉の緊張的關係を有するが故に、行為においてお互いに変容をもたらすものとして、換言すると自己に変容を迫るものとして、また自己に対する「試練」として把握されるのである。このような、常に自己を自己ならざるものへと導く「試練」としての「現実存在」観こそ、ヴェイユがラニョー、アランから引き継ぎ、かつ後期においてラディカルに推し進めて考察することになる重要な観念なのである。

こうした彼らの「現実存在」観は、つねに抽象ではなく具体的で実在的な行為を要請し、単なる知ではなく行為における変容の事実を要請する。そしてここには、行為における自己と世界の変容が〈事実性〉であると同時に〈課題性〉として自覚されるという、反省的自覚の二義性が存している。この反省的自覚の二義性の問題が、ヴェイユがラニョー、アランを通じて継承したところの問題系であるとも言える。上記のような文脈との連関でヴェイユ思想全体を把握し直した場合に、ヴェイユの初・中期から後期にかけての「転換」の問題も、フランス反省哲学の展開の問題として解釈される可能性が拓かれることになるのである。

#### 終章：シモーヌ・ヴェイユの宗教哲学——ヴェイユ後期思想の理解にむけて——

上記のような三章にわたる考察を経て、本論文では初期から後期・晩年までのヴェイユの思想をその哲学において統合的に把握する方向性を示した。そしてフランス反省哲学の一思潮の末端にヴェイユを位置づけることによって、ヴェイユ思想がその背景として有している特徴および問題系を明らかにすると同時にヴェイユ思想自体の前期・後期問題に対しても解釈の一つの方向性を提示した。

最後にこうした反省的自覚における二義性の展開として、ラニョー、アラン、ヴェイユらが共有する「教育」に対する態度を指摘する。それは、彼らが反省的に見出しうる精神の活動性を自己の本性としてのみならず、万人の本性であるとみて、そのような人間によって構成される自由なる精神の共同体定位した実践的思想、ソクラテス的な意味での「教育思想」への展開こそが、彼らに共有されている態度であるという視点である。こうした彼らの教育あるいは社会的実践への姿勢には、フランス革命以後の公教育制度のなかであって、いかに実定宗教に依拠しない仕方——言い換えるならライクな立場から——「人間性」を定義し、教育を成り立たせてゆくかという問題が、彼らの背後にはある。後期のヴェイユのテキストの内にキリスト教的モチーフや各種の神秘思想の反響を見出すことは容易に可能である。しかし、そうした研究態度では前傾に出てこない一面であるところの、源泉としての真理を啓示された真理としてではなく、万人が自己の根底に見出しうる真理として人々に提示することこそ、後期ヴェイユにおいて着目すべき最良の部分であるように思われるのである。

上記のような問題意識を原動力とした思索という点で、ヴェイユは高等師範学校以前の最初期から、労働問題・社会活動、そして教育活動に従事する中期、そして自由フランスで文書起草係として精力的に膨大なテキストを書き残した晩年に到るまで、常に一貫した立場を取っていると思われる。そして、ラニョーやアランの反省哲学の問題系にヴェイユを置き直した上で彼女の後期の著作群に目を向けると、従来頻繁に取り上げられてきたヴェイユの東洋思想や他宗教に対して示す親近感や神秘主義思想への深い共感、批判哲学的態度を根に持つフランス反省哲学が示しうる射程の広さと豊かさを証しするものであると同時に、今日「宗教哲学」の可能性を考えていくにあたって極めて多くの示唆を含んだものと評価されるべきであろうと思われるのである。

本論文における考察は、後期ヴェイユ思想をアランらとの連続性を考慮に入れた視点から解釈し、広くいき渡っているヴェイユ像からあえて距離をとりながら彼女の「哲学者」としての思考を取り上げることが試みた。本論文におけるこうした試みは独自の個性をもったフランス反省哲学の哲学者の一人としてヴェイユを位置付けることによって、彼女が位置を占める豊かなフランス反省哲学という思潮の射程をも、逆に照らしだすことをも期した、ヴェイユに対する新たな解釈を提示する試みであると言いたい。あらたな研究が開かれつつある現在、われわれはあらたなヴェイユ像をつくりあげてゆく必要があると思われるのである。